他力真宗報謝の真義

小川文平翁の報謝説を駁す

特45
156

他力眞宗

報謝の眞義

平翁の報謝説を駁す」

西川諦亮著

明治文庫

稱名と報謝

（佛恩報謝は稱名の、一行に限れり、本願の留ひなるを以てなりと云べる、ことを駁す）

念佛相續要文拾集云、念佛の外一切の佛事を念佛の助業と名け報謝と名けす、前三後一の正業は自出度けれとも本願の行にあらず、故に報謝と名けす助業と名く、正雜二行方便しひとへに專修をすゝめしひと云ふ是あり、

又云、信心正因、稱名報恩、此二つを以て本願相應とす。如實修行相應は信心ひとつに定めたりと云ひ、願に相應する故に外の雜緣虎にあしとは是あり、

（批評）、小川氏は眞宗に於て談ずる所の報恩行を、念佛一行に限るものとせり。其故は本願に乃至十念の誓ありて、其他の佛事供養等は本願に明文なしと云意なり。是れ甚だ宗義を誤解せしものなり、何となれは第十八願に至心信樂欲生我國の三信と乃至十念の念佛との二の願事ありて、即ちたのむ者を助くへし、稱うる者を救ふへしとは、共に往生淨土の業因を誓ひしものにて、佛恩報謝の誓言にあらず。是に就て四十八願を分段せは、拔苦與樂分、攝衆生分、種々利益分、の三段となるべし。其中第十八願は、攝衆生分中の誓願にて、衆生攝取を信と行との二事を以て誓はれしものなり、乃ち三信

はたのむ者を助くるの誓願にして、乃至十念は稱うる者を救ふべしの勅命なり。若し此の十念を以て直ちに報恩行の誓言とせば佛に報恩請求の過失ありと云ふべし。何となれは大海波浪の中に陷溺して一身將に魚服に葬らむとする者あり。偶ま人あり之を救濟せんとして云く。汝の身命救助を得ば何物を用て我に報すへしと。此の救助たる眞個哀愍の誠心より出たるものに非ずして、酬報希望の心より出てし動作と謂はさるへからず。此の如きは吾人の中に在りても多少慈愛を有する者の敢てせさる所なり。況や佛は十方衆生の身替に兆載永劫不惜身命の修行して、終に萬德圓滿の名號を成就し、之を一切衆生往生の正因に廻向し給ふもの、豈に凡夫吾人すら猶且つ耻づるが如き、報恩欲求不實顚倒の誓願を設け給はんや。故に眞宗の

聖教其數多く、乃至十念の解釋尠なからずと雖も、之を直に報恩欲求の文との給はさるは此の理あればなり。末燈鈔（二十丁）に、彌陀の本願と申すは名號を稱へん者を極樂へ迎へむと誓はせ給へるを云云とあり

尤も眞宗に於て、念佛を報恩行と談ずる據は、龍樹の指南即ち第十八願の乃至十念の文なれども、之を直に佛恩報謝の誓言と云ふにはあらず。其意は如來の教勅信受の一念に、往生の業事成辨するを以て、後念に亘り稱うる所の念佛は、其體正定業の念佛なるも、既に決定往生後の念佛なれば、蓮師の、佛法の上には何事も報謝と存すべきなりとの仰の如く、一聲々々報恩報德の思ひに住し稱うるを以て、之を報恩行と談するのみ。佛何ぞ衆生の報恩を誓ひ給はんや、

但し稱名には、自ら教人信の德用ありて、報恩に供はるが、又た佛意に契當して謝德となるかは別論なり、今はたゝ佛邊に斷して報恩行の誓ひなきを知るを以て要旨とす

第二章　佛事供養と報恩（上）

（佛事供養を以て報恩行とするときは、廢疾者等は遂に之を行ふ能はず、故に念佛一行を報恩行と皆ひたりと云へることを駁す）

念佛相續要文拾集云、もし稱名念佛の外佛事を報謝と名けたる正教あらは、手あへ足あへ、不具人、病床上の人、及ひ貧困人の家あし乞食者は、報恩謝德の行常に闕乏不足の歎を如何せんや。十方衆生の誓願何を以て滿足の心に住せしめんや

又云、念佛の外の佛事供養等を悉く報謝と名てすゝめ給はゝ、足あへ、手あへの不具人、橋下の非人乞食貧人は、報恩の行滿足のときあく、常に報謝を欠くの愁あきを得さりしあり、信心は滿足と雖も報謝は常に欠乏の心ありて、隨て信心も自ら危く覺ゆる事にあるを免かれさるへし

（批評）、佛の心光は後念相續行の何如によりて、攝取不攝取を選定するものにあらず。往生の得否は實に他力信心の有無に由るのみ。されは大經には聞其名號、信心歡喜、乃至一念、至心廻向、即得往生、住不退轉。或は其佛本願力、聞名欲往生、皆悉到彼國、自致不退轉と說き、其證文枚擧に遑あらず。特に小川氏の所謂法然佛は選擇集三心章の票文には、念佛の行者必ず三心を具すべき文とあり。又た四修章の票文には、念佛の行者四修法を行用すべき文とあり。安心の方には必の字を置き、相續作業の方には之を省き給ふは此の意なり。されは信後の報恩起行作業に就て、行者の機類區々の差別あり、或は五十六十年の壽命を得て、其間精進堅固頭燃を救ふが如く行する者もあり。又た身分職業の如何に依り、自ら懈怠粗略に流

る〻者もあるべし。或は病人貧窶不具足者の、思のまゝ佛事供養を
營み得ざるもあり。又た至て短命にして一枝の香花も供し得ず、一
遍の念佛も口に出る暇もなく、絶命する者もあるべし。要するに往
生の得否は信心の有無に依り信後の行業を待て定むべきにあらず。
故に執持鈔(十)には、根機つたなしとて卑下すべからず、佛に下根を
救ふの大悲あり。行業をろそかなりとて疑ふべからず、經に乃至一
念の文ありと。又た口傳鈔下(二十)には、如來の大悲は短命の根機
を本とし給へり、もし多念を以て本願とせば、命ち一刹那につゝま
る無常迅速の機、いかでか本願に乘すべきやと。是等の諸文を照合
せば、予か所說の妄ならざるやを了知せらるべし。特に非人乞食病
人不具者等の心中には、常に佛恩の深重なるを憶念すと雖も、如何

せん果報の拙劣にして、佛事供養の其意の如くならざるを慚謝する
のみ。然れども佛は之を報恩の欠乏懈怠として擯斥し給はざるのみ
ならず。彌增に慈愛心を加へ給ふべし、喩へは孝子あり、日夜父母
の安慰に汲々せしも、不幸にして身體不具、或は家計貧苦の爲め、
思ひのまゝ孝養の到らざるを見て、違恩戾義の不孝子とし、怨嗟疎
外するの父母あらんや。却て其の不孝を憐念斷腸するのみ。甚於父
母念子の佛心豈に是に異ならんや
又た小川氏は信心滿足すとも、報謝は常に欠乏の心ありて、隨て信
心も自ら危く覺ゆと云へり。是亦た何の謂ぞ、報恩の行業に就ては
假令ひ千億の身體を寸斷すとも、報し盡すべき輕々たる佛恩にあら
ざれは。何事を用て報謝すとも、生涯滿足の思ひ起るべき道理なか

るべし。小川氏は念佛は功德圓滿の嘉號なれば、之を稱へてこそ報謝の行業自ら滿足の思に住すべし。他の佛事供養の比にあらずと、所修の行業中に功德の多寡を較量し、彼を捨て此を取るの思考なるへしと雖も、若如此功德の輕重を比するときは一聲の稱名にても事足るべし、何そ多念の念佛を要せむや一多證文に云く、一念は功德のきわまり、一念に萬德悉く具はる。萬つの善みなをさまるとあれば、而に善導元祖は日々六萬十萬の多念を勵み給ひ。宗祖蓮師は強に其數を計せられざるも、ねてもさめても命のあらん限は稱名念佛すべきものなりとあれば、其稱數の尠なからざるや明なり。是等知識高僧の所行を徒勞無用の行と謂ふか、

要之に小川氏は世間の是非を恐れて言を稱名報恩に藉ると雖も、其

實稱名正因の徒ならん、

第三章　佛事供養と報恩（下）

念佛行者の相續に就ては、自ら三業二利起行作業の發動するは自然の道理にて、天親菩薩の淨土論に五念門を說示せり。五念門とは一禮拜、二讚嘆、三作願、四觀察、五廻向なり。此の五念門をば三業二利に分てば第一の禮拜は身業、第二の讚嘆は口業、第三第四の作願觀察は意業、此の四念門は自利の方なり。第五の廻向門は利他の方なり。

圖にて示さは左の如し

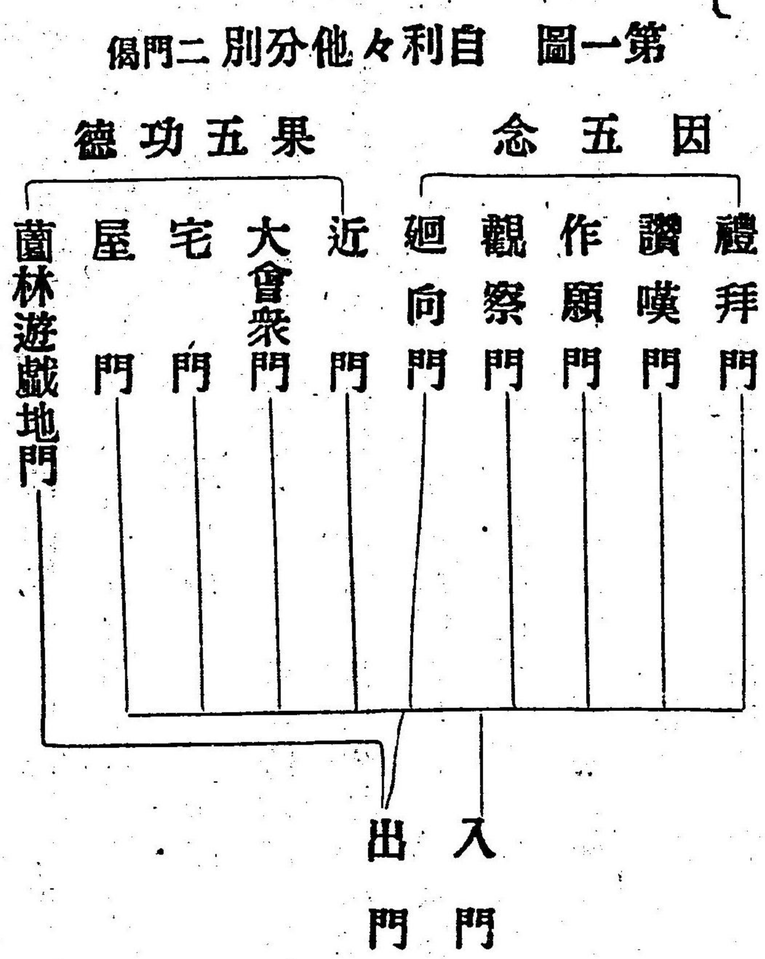
禮拜門　身業
讃嘆門　口業　自利
作願門
観察門　意業
廻向門　利他

此の五念門は、浄土論に在ては行者所修の行業なれども、其源は法藏菩薩因位の中、兆載永劫の間の所修の行業にして、之を一名號に成就して、衆生往生の因行となし給へり。故に曇鸞大師は、往生論註に、四十八願中より、第十一第十八第二十二の三願を引證して、往生の因も滅度の果も、往相も還相も、共に他力廻向なるの意を密示せり。是以て宗祖は二門偈を製作して、不可思議兆載永劫漸次成

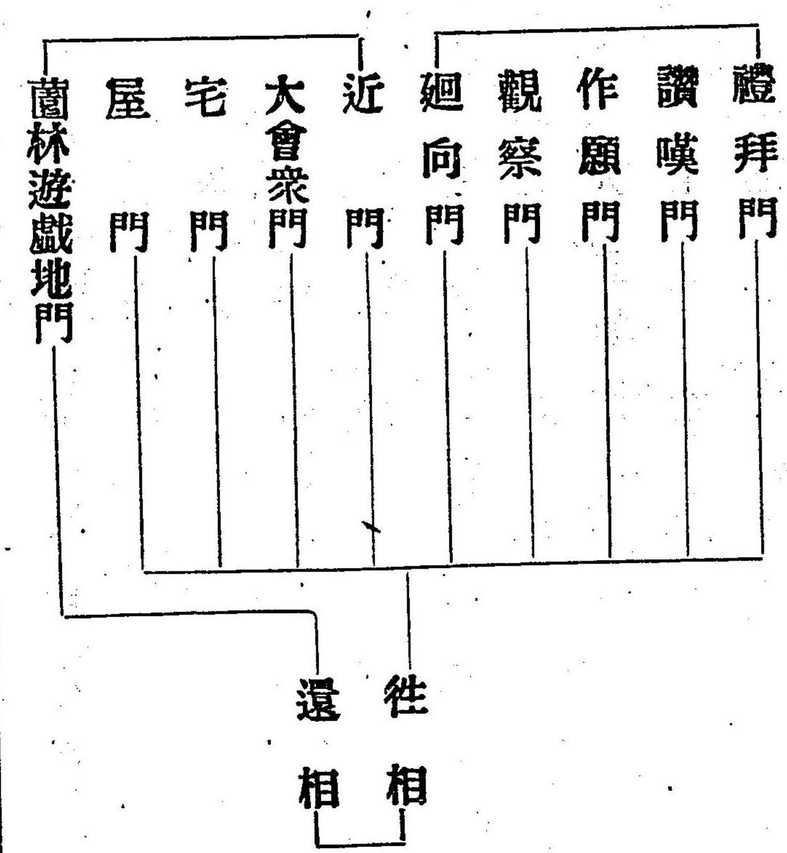
就五種門と、五念門全く法藏因位中の所行たる事を説示し給へり。抑も法藏菩薩も難行苦行して、五念門を修行せられしは何の爲めぞと云ふに、之れ全く六字名號に攝入して、令諸衆生功德成就と、十方衆生に廻施し給はん爲なり。されば執持鈔には能機の心、所歸の佛智に相應するとき、彼佛の因位の萬行果地の萬德、悉く名號の中に攝在して、十方衆生の往生の行體となれば、阿彌陀佛即是其行と釋し給へり、されば歸命の一念發得のとき、我等凡夫は南無阿彌陀佛の主となれば、後念相續の動作に、三業二利五念門の發動するは恰も枝葉の幹より生し、煙の燃火より起るが如く、自然の數理なり然りと雖とも、法藏所修の如き難事苦行は、固より吾人の企及すべき所にあらず、たゞ男女老弱富貴貧賤各々之の分に應し機に隨て、

若干の行業に薫發するのみ、前來の所說更に圖を以て解釋せは左の如し

第一圖　自利々他分別二門偈



第二圖　往相還相分別



第三圖　往相廻向還相廻向分別論註之文

- 往相
  - 禮拜門
  - 讚嘆門
  - 作願門
  - 觀察門
  - 廻向門
  - 近門
  - 大會衆門
  - 宅門
  - 屋門
  - 園林遊戲地門
- 還相

第四圖　論註之意

（本）

- 往相行者
  - 第十八願廻向
    - 禮拜門
    - 讚嘆門
    - 作願門
    - 觀察門
    - 廻向門
    - 近門
    - 大會衆門
    - 宅門
    - 屋門
  - 第十一願廻向
    - 現益
    - 當益
  - 第廿二願廻向
    - 園林遊戲地門
- 還相菩薩

（末）

第四章　懇志と報謝

（金錢を獻し若しくは參詣するを報謝にあらすと云ふことを敍す）

念佛相續要文拾集云、予は中年頃まで、念佛の外金錢手足まで報謝と心得て、報謝の行思ふ程に叶はす、其爲に心を苦めて涙を出したる事もあり。報謝を不足とし、遂に根機相應の本願のとふとさも覺へす仰かす、信心もうと〳〵かりしあり。本願相應の佛恩報謝の正敎を知らさるか故云云、

又云、予、中年佛恩報謝と定めたる佛說と、宗師の正釋とを知らすして、自心を苦めたることあり。予は其僧に對し報謝金錢我心に叶はさるを思ひ、涙を出したる事もありしあり。後ち經釋宗師の正敎に照し、經釋文を拔萃し并へて、いよ〳〵其正文によりて疑ひなく念佛する身となれり。予はたま〳〵昔日のありさまを思ひて

今日予の所聞を大きに獨り喜ふものあり。但し彼僧は、他の一文不知の婦女子、宿緣ありて聞法の心ろ起りたる人々、金錢手足を以て報謝の行を名として苦しむる事の少しとせす、その爲めに信心をも何とおく決定せさる人々のありさまを思ひ、密に述懷の心ろ止まさりしあり、

（批評）、眞宗の儀を心得るには、正因門と起行門とを判然區別せさるべからず、歎異鈔（一三十）に、一紙半錢も佛法のかたに入れすとも他力に心をかけて信心ふかくは、夫れこそ願の本意にて候とあり。又は蓮師は珠數をもたすとも、往生極樂のためには、たゝ他力の信心ひとつばかりなりと仰せらる。往生極樂のためにはたゞ他力の信心ばかりにて、其他金錢手足等の行ひは、たゞ是れ佛恩報謝の起行なり。されば後念相續の行務を待て、往生の素懷を遂くと謂ふにあ

らす。然れども既に信心決定せしもの、上盡一形報恩謝德の行ひあるは自然の法則にて、喩へは水車の晝夜輾々廻轉の止むなきは、滔々流水の勢力に由れはなり。信者の動作に報恩謝德の行業あるは、他力信心の流水之か起因催促を爲すを以てなり。之を改邪鈔本(二十)には、この機の上には他力の安心より催されて、佛恩報謝の起行作業はせらるべきによりてと示されたり。

後念の起行を、天親の淨土論には、たゞ五念門とせられしも、此の五門中には、自ら無量の行業を含藏せり。例せは五念門中、第二の讚嘆門には、稱彼如來名の一なれとも、善導の五正行には、讚嘆、供養、正行の外に、更に稱名正行を別開せし如きは其證なり。されば金錢奉施も、參詣苦行も、この五種門中に悉皆總攝せるや明なり

故に金錢奉施の報謝行たることは、破邪顯正鈔下(七)に、凡そ佛法修行の法、供佛施僧のいとなみを先きとし、佛道欣求のならひ、不惜身命の思を本とす、身命なを惜むべからす、況や財寶に於てをやこれによりて一向專修の行人等、かつは師恩を報謝せんがため、乃至師範の所に贈りあげん條、これ既に信心の致す所なりと說き。又た御一代聞書(三九丁)には、世間につかふ事は、佛物を徒らにすること、よく〳〵恐ろしく思ふへし。去りなから佛法の方へは、いかほと物を入れてもあかぬ道理なり、また報謝ともなるべしとあり、參詣苦行の報謝たることも亦御一代記聞書(六六丁)に示して、大阪殿にて、或人前々住上人に申され候、今朝曉きより老たる者にて候かゝられ候、神變なることとなるよし申され候へば。やがて仰られ候、

信だにあれば、辛勞とは思はぬなり。信のうへは、佛恩報謝と存し候へは、苦勞とは思はぬなりと仰せられしと說き給へり。是等の聖教を拜閲せは、金錢奉施も參詣苦行も、一として報恩行にあらすとは云ふべからず

抑も我等凡夫無量劫來、無明生死の長夜に呻吟せしもの、今や佛日他力の大悲に遭遇して、速證無生の利益を蒙ることを得たり。則ち其佛恩の深重を思念せは、力の及ふだけ、身の耐る限りは、孜々煩惱の怠馬に鞭ち、駸々報謝の正路を進行すべきに、彼を捨て此を取り、報恩行中の拔萃切取して、恬然恥るなきは何事そ、其中年頃まては、金錢手足の思の如くならざりしを悲嘆せしは、尙少しく取るべき所あり。中年以後は禮拜も、參詣も、供佛も、施僧も、此等一

切は佛恩報謝の業行に非ずと放擲し、而して自ら眞宗の信者に擬す若し之に名稱を附せば如何なる信者ぞ、經云憍慢弊懈怠難以信此法と、則ち所謂未得已得の增上慢とも謂ふべきか

然れども、方今僧侶界中に在て、佛恩報謝の名を以て、頻に門徒の財物を貪り、而して其行狀の如何を問はゞ、日夜たゞ酒色に耽溺して、宗門の興廢を顧みず、未來の浮沈を意とせず、俗人尙を恥づるの行爲を以て得々とし、色界の鬼と嘲られ、賤婦の奴と呼はれ、日本佛教の惡魔と名けられ、社會風紀の害物と嘆せらるゝ者あり。此の如きの妖僧を、道德の先導者に擬し、未來の媒介者と恃まんとするは、頑魯の極と謂つべし、況や其求に應して懇志を運ふは、恰も胃を病む者に、脂肪多き食物を與ふると一般、害ありて益なきのみ

予は元來深く佛教を信ずる者なり。佛教を信ずるは、即ち因果を信する者なるも、信施を受け、佛物を食しながら、不法墮落の行爲を以て、一生何等の風波もなく、安泰以て其終を全することあらば、予は却て因果律の如何を怪まざるを得ず。然れども殷國の滅亡せしは紂王の暴戾に依り、ルーテルの興起せしは、羅馬法王の墮落に外ならず、天罰夫れ此の如し、因果豈に過りあらんや。則ち唯之の受報に遲速の別あるのみ、謹まざるべけんや

此の如く痛論せしも、其罪を憎で其人を憎まずとは古人の誡言なり予は强ち墮落僧徒の自滅を望む者にあらず、又た之れが退去を欲する者にあらず。たゞ其身人天の大導師たるを了悟し、且つ佛物信施の粗忽に附すべからざるを領知し、前非を改悟し將來を誡愼し、道

第五章　歎異鈔の眞意

（「歎異鈔」（十五丁）「經釋のゆくちの一節に對する章の誤解を駁す」）

念佛相續要文拾集云、一文不通にして、經釋のゆくちもしらさらむものゝ、とおへ易からむ爲めの名號にをはしますゆへに、易行とは云ふなりと仰せられたり。手おへ、手おへ、不具人橋下の乞食非人の貧人も缺くることなく、ゆへに易行とは申なり。十方衆生の誓願なれはなり。乃至病床上にも猶報恩の稱名とおへ易き名號にをわしますゆへに、易行とは申すならむ

（批評）、歎異鈔（十五丁）の文を引證せしは佛事供養は難事なり、貧人不具足者の行し得べきものにあらす、獨り稱名の一行は、男女貴賤時處諸緣の簡びなければ、之を易行と云ふとの料簡なるも、予は氏に

德堅固衆生渡度以て其職責に盡瘁あらんことを熱望するのみ。若夫れ改心此の如くならば、佛天の加護因果の法理として、宗門の興起火を視るより瞭々たり、然れば則ち何ぞ小川氏の如く、供佛施僧は報恩行に非すなどゝ、讒語を弄する者の世に出ることあらんや

歎異鈔の熟讀を望まざるを得す。一文不通にして、經釋のゆくぢもしらさらむ人の、稱へ易からんための名號にてをはしますゆへに易行といふ。學問をむねとするは聖道門なり、難行となづく。あやまて學問して名聞利養のをもひに住するひと、順次の往生いかゞあらんすらんといふ證文も候云云とある限りは之れ聖道の難行と、淨土の易行とを比較相對せられし御言にて、決して、信後の報謝行中に廢立取捨せられし文にあらす。抑も眞宗に於て念佛を萬德圓滿と云ひ、易行易修と云ふは、共に之れ聖道難行に對比するの言はなり。其故は選擇集本願章に、第十八願には一切諸行を選捨し、たゞ偏へに念佛一行を選取して往生の本願とせしは如何との問に對し、勝劣難易の二義を以て解答し給へり、乃ち念佛を圓滿德號と云ひ、萬德

圓備なとゝ云ふは此の第一義の勝劣對を據とせしものなり。又た歎異鈔の、となへやすからんための名號にてをわしますゆへに易行と云ふとは、第二義の難易對の御釋を據とせられしものにて、何れも報恩行中に勝劣難易を分ち給ふにはあらす

第六章　和讃の眞意

（如來大悲讃に對する義の誤解を駁す）

念佛相續要文拾集云、和讃に身を粉にしても報すへし、骨を碎きても謝すへしの御文あれは、之を身體の報謝すへきの御冒趣の如くも思ひあすか、又云、もし此文を左よふに思ひとるとせは、先つ宗師は、何れの時に身を粉にし骨を碎き給ふや、宗師御自身に粉にも碎きもし給はす、人に勸め給ふとするときは、自身教人信第一に欠くものとす。又た聖者の言は、必す行ひ得へき言にあらされは口外するものにあらす。此文の心は佛恩師恩の深重あることを敎へ給ふの喩とす、我等第一に惜み、第一に苦痛を感するは、我身に過くるはあらす、針一本をさすも痛苦に耐へさるを覺ゆるあり。かゝる身を粉にし、骨を碎くとき如何ある苦痛を感すへき、かよふに苦痛するも、佛恩を報するに足るよふの佛恩の深きにあらす。さ

れは我等身體を以て報すへき輕き佛恩にあらす、佛恩を知らしめ給ふものとす。到底人身にて報し得へき佛恩にあらす、此故に佛の方に南無阿彌陀佛と名號を成就し給ひて、命諸衆生功德成就と與へて、此の名號を稱へよ、之を佛恩報謝至德無碍の大行として、佛恩報謝と名くと敎へ給ふとす。彌陀廻向の御名あれは、十方に滿ち給ふと云ふ是れあり、

(批評)、如來大悲の和讃を身業の報謝にあらずと遮するは何の謂そ元來此の和讃は聖覺法印の、其師元祖聖人の恩德を讚嘆して、倩思教授恩德實等彌陀悲願者歟粉骨可報之摧身可謝之とある文は、般舟讚の文を會合して製作せられしものなり。聖覺はその師恩に感泣して、その起居動靜に、仕事供奉の周到なりしまゝを筆端に述顯はし給ひしが此の文なり、渾て弟子たるものゝ其師に事るは、持名鈔（末十四丁）の、ながく輪廻の故鄉をはなれん事は、ひとへに圖らさる幸ひなり。まことに是れ本師知識の恩德にあらずと云ふことなし、力の耐へるに隨ひて、いかでか報謝の志をぬきいでざらんや。或は長阿含經のなかに、師長に事うるに五事あり、一には給仕をいたし、二には禮敬供養す、三には尊重頂戴す、四には師教勅あれば敬順してたがふことなし、五には師に隨ひて法を聞きよく持ちて忘れずとある如きものにして則ち聖覺の粉骨摧身の讚は、身體の報謝なること明なり。宗祖は此の聖覺の語を隨宜轉用し、更に佛恩を加へて、一首の和讚を編成せられしまてにて、其報恩謝德の行相は、毫も差別ある事なし。尤も强ちに流血切肉して報謝せよとの謂にあらず、唯その思想の切極にして、身骨粉碎なを足らざるの思ひをなせとの

勸辭なり。故に身を粉にしても骨を碎きても、もの字を用て其意を示せり、

又た小川氏は、この和讃は佛恩師恩の深重なるを教へ給ふの喩なりと云へり。是亦た何の謂そ、世の報ずべし謝すべしの言は、確に他を勸令するの辭なり。何そ强ちに迂遠の解釋を爲して、祖意に戻るを嘉するや。要するに前來數多の和讃を以て、或は如來廻向の恩德を讃し、又た知識傳持の高德を嘆せられしに依り、今此の處に於て更に一首の和讃を製し、之に對する報恩謝德の行業忽にすべからざる事を結勸し給ひしものなり

因みに言ふ。近來眞宗信者と稱する者の行爲を見聞するに、曰く我れは求法の爲に、年々幾回本山へ參詣せり。我れは報謝の爲め、月

〻何度別院へ參集せりと。而して近方の寺院や、地方の寄合講なとに、偶〻説教示談の開席あるも、施與物のあらさる限りは、左程に參詣苦行の營みなきものあり。此等の徒は、果して聞法、又た報謝の篤志より出てし行爲と謂ふべきか。他なし見物或は買物の爲にあらされは、名聞勝他、自ら信者の虛名を世に售らんと欲するのみ。故に自家の佛壇は、塵埃高く積て山を爲し、佛花は常に枯て薪に類し、剩へ父母祖先の忌日に際會すとも、佛事供養の勤修に忘り、口常に惡言雜語を吐て、絶て稱名念佛の出るなきは、是れ其の明證なり。嗚呼小川氏は一種の異安心者なるも、異安心者と無安心者と其の優劣果して何れに在るや

第七章　念佛以外の報恩行

（眞宗の正教には念佛以外の行を報謝と云へる明文なしと云へる事を惑す

念佛相續要文拾集云、佛恩報謝に念佛の外正教なし、唯一念佛を以て報謝と名く。念佛の外一切佛事を報謝と名けず、助業と名く、念佛の外佛事を以て報謝と名けたる正教なしと、誓て斷言す

又云、十八願を信樂して、相承宗師の旨敎に順して、西方往生を願ふ有緣の同明者皆を決して近く正信偈御和讃八十通を拜閲すへし。予は十方恒沙諸佛の前に於て斷言す

又一枚摺云、佛恩報謝とは一行念佛を申すに限れりとは、近く一枚起請文正信偈乃至を以て證據とす

（批評）、一宗の要旨を斷定するに當て、僅々二三の聖教に據て、其說を主張せんとするは何事そ。先つ元祖の所說を領せんには、選擇集を閲し。宗祖の所談を知らんには、本書を繙き、各々開宗立教の書を基礎とし、加うるに宗内若干の聖教に推亘り、而して後ち始て一宗の要旨を斷定せさるへからす。小川氏の僅々二三の聖教を證據とし、以て自說を骨張せむとするは、或は所引の聖教は、其說の資助を藉るの便利と思惟するか、然らは則ち其聖教に就て說明を試みむ

一枚起請文は、安心と四修とを、南無阿彌陀佛と申せは往生するそと思ひとりての起行念佛に攝入して、教化し給ふ提撕なれは、稱名も諸供養も、共に佛恩報謝の言なきは當然なり。然りと雖も既に佛

願を信し、佛號を稱うるもの、何そ香花燈明、供佛報恩の缺くべき理あらんや。故に選擇集、四修章に、佛像禮拜、香花供養等を詳說して、終に當念佛恩報盡爲期と結勸し給ふは此意なり。又た正信偈は、行信両卷の中間に在りて、題號の如く名號を正信する事を明すを以て所詮とせり。是以て依經分、依釋分、六十行百二十句の中に報恩行はたゝ龍樹章に、唯能常稱如來號、應報大悲弘誓恩の一行一句あるのみ。尤も此の佛恩報謝は、小川氏の着眼證據とする如く、稱名の一行なるも、這は是れ易行品彌陀章の人能念是佛云云の句に依りて、憶念彌陀佛本願乃至入必定との給ひ。是故我常念の句を大論の文に照合して、唯能常稱如來號、應報大悲弘誓恩との給ひしものにて。佛名を稱するもの、他の佛事供養の附隨するは勿論なり。

身口意三業の動作は、恰も鼎の三足の如く、一を擧くれは一必す之に隨ふ。故に同く彌陀章に、我今身口意合掌稽首禮と云ひ若人願作佛心念阿彌陀と云ひ、彼佛本願力十方諸菩薩來供養聽法是故我稽と云ひ、我今亦如是稱讚無量德と云ひ、以此福因緣所獲上妙德願諸衆生類皆亦悉當得とあるを以て、眞意を領知すへし。況や本偈前の文に、知恩報德理宜先啓と、偈文製作の本意はたゝ佛恩報謝、即ち讚嘆行の爲めなるをや。且又た本偈を他に向ふときは、所謂利益有情教人信の外なければ、一偈悉く佛恩報謝行と云ふも過言にあらざるべし

次に和讚の中にも、佛恩報謝の稱名に限らざる證文多しと雖も、暫く一二を指示せば、佛惠功德をほめしめて、十方の有緣にきかしめ

んとは、宗祖の和讃御製作は佛德讃嘆報恩謝德の爲めなることを現はし。次句に信心すでに得む人はつねに佛恩報ずべしと、他に向ふて佛恩報謝を勸令し給ふ。但し和讃は句數に限りあり、その行相の如何は、正像末和讃の身を粉にしても報ずべしの句を照合せば、了知せらるべし。必ず三業二利に亘ること明了たり。又た御文は蓮師の御時代には、種々の秘事法門流行せり、其中稱名を以て往生の正因と擬する異解者に對して、三業の行を特に念佛の一行に收めて、報恩行を勸め給ひしまでにて、曩にも縷述せし如く、稱名に他の行業の附隨するは、必然の道理なり。故に蓮師他の御教化に色にも姿にも見ゆるなりとの給ふは是れなり

第八章　懇志の本義

（「御文」の「念佛申さるへきはかりなり」の言と誤解せることを駁す）

念佛相續要文拾集云、御文に他力の信心と云ふ事を心中にたくはへられ候て、そのうへには佛恩報謝の爲には行住坐臥に、此の心得にてあるあらは、此度の往生は一定あり。（以上にて往生の用は滿足すとの仰せなり）このうれしさの餘りには師匠坊主の在所へもあゆみを運ひ、志をも致すへきものあり云云、

又云、念佛申さるへきはかりと云云。はかりとは別の用あさ言はあり。喩へは茶はかり、酒はかりと云ふとき、別の品を加へさるの言はあり。念佛はかりとは、外の報謝の行を加へさるの言はあり。念佛にて不足のあさを知らせ給ふ言はあり

又云、今の如く念佛はかりにて、滿足の佛恩報謝を行して、少しも心に不足あさを

以て、根機相應の本願のたふとさも身に知られて、其うれしさか餘りて、その餘りを以て、師匠坊主の在所へもあゆみをはこへと云々、但しあまりと云ふものは、必用のものにあらす、ありてもよし、亦たなくてもよし、餘りある人も、餘りなき人もあり。全く報謝の行に非さること明了たり

(批評)、此章は往生の得否に就ての所論なるも、或は信後の行業中にその要不を差別せんとするか、若し往生の得否に就ての所論とせば、眞宗の所談はたゞ他力の信心ひとつを以て往生の要とし、後念の起行を俟つものにあらず、若又た後念の起行に要不を論せば、稱名も必要なり、師恩報德も亦た缺くべからざる行業なり、小川氏は御文に念佛申さるべきばかりなりとあり、又た其結文に此の心得にてあるならば、此度の往生は一定なりとあれば、往生の用

は、他力の信心と、稱名念佛とにて滿足し、其他の師恩報德等は、必用の物にあらずと思考せり。是以て細註を加へて、以上にて往生の用は滿足すとの仰せなりと云へし。是れ甚た文意を失損するものにして、念佛申すはかりなりとは、所謂酒はかり、茶はかりと云へる如く、餘物を簡遮するの言なるは勿論なるも、信海等流の起行中に、差別取捨を爲すの謂にあらす。意ろ自力聖道の行諸難行に對侍して、他力易行を教示し給ふを以てはかりなりとの給へるなり

又たこの心得にてあるならば此度の往生は一定なりの結勸文は、所對の人と其師匠坊主との彼此區別あるを以て、其中間に此の言を置かれしものにて、要不を差別するの義にあらす。若し尙を固執して信行の二を必要とし、師恩報謝を不要とせは、次下の文に師匠坊主

の在所へも云云と説終りて、是即ち當流の儀をよく心得たる、信心の人とは申すべき者なりとの總結文を、如何か解釋するや。之を遮詮法にて解説せは、信行の二を心得ず、又た師匠坊主の在所へも歩を運ばず、志をも致さぬ者は當流の儀を心得たる信心の人とは申さぬと云へる結文なり。元來信後の起行に要不の差別を爲すは何事ぞ讃嘆も、稱名も、供佛も、施僧も、皆共に如來廻向の行業、他力信心の催しならずや。上に引證せし如く、破邪顯正鈔に、佛道修行の法、供佛施僧のいとなみを先とし、佛道欣求のならい、不惜身命の思ひを本とす。身命なを惜むべからず、況や財寶に於てをや、是れに依りて、一向專修の行人等、佛恩を報謝せんため乃至師範の所に贈りあげん條、これすてに信心の致す所なりとは是なり

又た、此のうれしさの餘りと云へるを、世語に餘計とか、すてがてらとかと云ふ言と同視するは、是亦た其意を失するものなり。餘りとは溢出の謂にて、喜ひは身にもあまりぬるかなと云へる如く、信心を得れば、歡喜の心を生し、歡喜の心生ずれば、知恩報德の行ひあり、是以て歡喜と報德との中間みちづたへの意味か、今ま茲の餘りと云へる御言にて決して餘計不要の謂にあらず。信巻現生十種の益の中に、心多歡喜の次に、知恩報德を列ね、又た淨土見聞集(十二)には、往生の定まるしるしには、慶喜の心起るなり。慶喜の心の起るしるしには、報恩謝德の思ひあり。とは此意なり

抑も法を説く者は佛なり、法を傳る者は僧なり。三寶不離、義意相通す。故に佛を尊とむ者は、また能く僧を敬す。若し法を信して、

佛を粗畧にし、佛法を尊信して、僧を輕侮する者あらば、眞實未た信者と謂ふべからず。敗邪鈔末(十九)に此の立思を示して、知識に於て世尊の思を爲し候。乃至木像ものいはす、經典口なければ、傳へ聞かしむる所の恩德を耳にたくはへん行者は、謝德の思を專にして如來の代官と仰ひて崇むへきにこそあれ、云云とあり。今日の僧は昔日の阿難目蓮の如き無漏聖者に非すと雖も、以瓦代金澆季の世界苟も扶宗護法の精神あらば、亦た三寶の位中を出でず。豈に之を蔑視するの理あらんや

傳聞す、小川氏は念佛專修の人なりと、而に其念佛相續集に、

一釋迦世尊佛敎て說たまふ。未來に向ふの信心を決定せんとおもはゝ、師をえらぶべしと。(われも一法あり)、

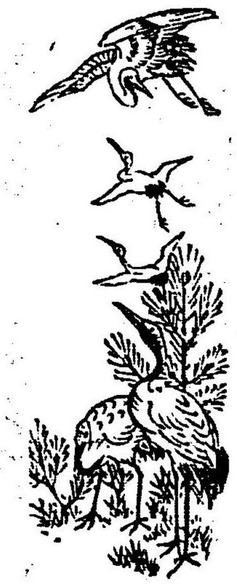
一如來ありと自心に信する方を師として開法すれば、決定心をうるありと說たまふあり、

此佛說を信ぜるうへは、敎の如く如來と信する師を求めざれば、佛說に順ぜるものにあらぜと決心す、

一こゝに於て廣く學師を察するに、我心中に學師とは信ぜるも、卽ち如來ありと信ぜる方を尋ね得ざりしあり。されは師を古に求る外あしと決心し、近く中大師、開山大師、元大師、善導大師、此四大師をこそは、我心中に如來と信じて疑はす。依て此四大師を以て、未來世に向ふの眞師と決定す。此四大師をば世尊佛は說て如來と名けられたりと、

記載せり。其四大師を尊信するは可なるも、其他今日の僧侶を輕侮すると共に、其所說の決定心を得るに足らすと斷定するは、慢か僻か。富山の萬金丹は能く病痾を治せり、而に行商賣子の如何に依て

藥効の有無を論ずべからず。但し善導所説の就人立信とは其致別なり。又聞く小川氏は獨學ながらも、釋尊一代經を通讀せりと。而して蓮師の御文を解得せざること此の如し。予は其の人と爲りを怪むものなり。或は他に事情の伏在して然るなきか、



第九章　讀經と報謝

（朝夕正信偈を讀むは、佛恩報謝にあらすと云へる説を駁す）

念佛相續要文拾集云、正信偈を朝夕讀み申すを佛恩報謝と申すは、後の人の私に思ひおしたること明おり。佛恩報謝とは念佛に限りたるにて、念佛の外いかある佛事も、佛恩報謝と名けたる經釋の文を見す

又云、御在世に二人あり。一人云く、朝夕正信偈をよみ申すは往生の用とおると云ふ、一人は用におらぬと云ふ。このとき蓮如佛仰せに、二人共にわろし、おるおらぬと云ふ事にはあらす、是れはかよふの謂れを書き殘し給ひしに依りて、信心を決定して、往生をも期する身とおられたる事のありかたさよと、聖人の御前に出てゝよろこふ心おりと。云云正敎に見へたり、佛報恩謝と名けす

(批評)、引く所の御一代記の文は、正信偈和讃の、報謝行たるや否やを問答せられし文にあらず、佛前勤行のとき、正信偈又は和讃の一首々々の間たに稱ふる所の念佛に就ての御教示なり。文に云く、一つのたまわく、朝夕正信偈和讃にて念佛申すわ往生のたねになるべきか、たねにはなるましきかと、名々坊主に御尋ねあり。みな申されけるは、往生のたねになるへしと申したる人もあり。往生のたねにはなるましきと云ふ人もありけるとき。仰にいつれもわろし、正信偈和讃は衆生の彌陀如來を一念にたのみまいらせて、後生たすかりまふせとの理はりを顯はされたり。よくきゝわけて信心をとりて、ありかたや〳〵と聖人の御前にてよろこ ふことなりと、くれ〳〵仰せ候なり

此の御文を熟讀せよ、蓮如上人の御尋は、朝夕正信偈和讃にて念佛申すは云云とあり、此のにての言は、魚類にて酒を飲む、野菜物にて飯を嚙すと云ふ如く、言旨は酒飯に在りて、魚類野菜物の副食物の謂にあらす、今も亦た然り、正信偈和讃にて念佛申すとあれば、正信偈和讃を指示せしに非ずして、その中間の念佛に就ての御示しなり。依て御諭に、正信偈和讃は、衆生の彌陀如來を一念にたのめとの御教示なれは、之を熟讀玩味して、ありかたやとふとやと、聖人の御前にて念佛申すか、正信偈また和讃一首々々の中間の念佛なりと云へる意なり。然れば則ち勤行前後の念佛にもあらす、又た正信偈和讃を指し給へる言にあらざること明なり。御一代記の次章に此の六字の名號我か物にてありてこそ、稱へて佛菩薩にまいらすべ

けれ、一念一心に後生助け給へとたのめは、やかて御助けにあづかる事の、ありかたや〳〵と申すばかりなりとあり。此章と同趣なり何そ文を見るの疎忽なるや

附言す、正信偈和讃等の拜讀、何行の所攝なるやを判定せは、讃嘆行と云ふへし。破邪顯正鈔中（九丁）に、次に和讃のこと、乃至五種の正行に配せは、第五の讃嘆に攝すべきかと、是なり。抑も稱名の既に報謝行たる以上は、其他の讃嘆行等の、報恩行たるや勿論なり。共に是れ信後に於ける同類行なればなり、故に蓮師の仰に、佛法にはまいらせ心ろわろし、之をして御心に叶はんと思ふこゝろなり。佛法の上には何事も報謝と存すへきなりと、何事もとは、念佛一行に限らさること必せり、且又た報謝に具はらさる物を、報謝と存せよの御示しあるべき筈なし若し報謝に具はらざるものを、報謝と存せよとの給ひしものとせば、蓮師に食言の罪ありと云ふべし、豈に其理あらんや

第十章　教人信の實行

（教人信は凡庸の及ふ所にあらすと云へる說を駁す）

念佛相續要文拾集云、佛恩報謝とは、信心念佛に限る事、但し教人信報恩とは別事凡庸の及ふ所にあらす、難中轉更難、

（批評）、小川氏は、念佛の外なる一切の行業を、佛恩報謝と名けたること聖教中に明文なしと斷言せしに、何ぞ圖らん其尊稱善導佛の禮讃に自信教人信難中轉更難大悲轉普化眞成報佛恩とありて、忽ち

自說と牴觸せり、是を以て自の信心は得易くも、之を他に向ふて勸化すること至難、凡庸の及ふ所に非すとするか、是亦た奇怪の至なり、既に自の信心は佛心大悲の惠に依りて、輒すく決得する者とせば、他に向ふての勸化、亦た他力加護の增上緣あり、何そ至難凡庸不及の事と云ふや。且又た難中轉更難の句を、自得信心の方に除きて、獨り教人信の方のみに屬するは何故そ、所謂文を曲けて義を成すと云ふものか

教人信の至難と謂ふへからさるは、御一代記(四十八丁)に、一文字も知らぬとも、人に聖教をよませ、聽聞させて信をとらするは、聖教よますの聖教よみなり。乃至自信教人信の道理なりと仰せられ候。乃至何もしらねとも、佛の加備力の故に、尼入道などのよろこはるゝを

聞きて、人も信をとるなりとあり。然らば教人信凡庸不及事と云ふへからず。要するに教人信の難易は、自得信心の何如に依るのみ、御一代記(四十)に、信もなくて人に信を取れよ〳〵と申すは、我物をもたずして、人に物を取らすべきと云ふ心なり。人承引あるべからず。乃至自信教人信と候ときは、先つ我か信心決定して、人にも教へて佛恩になるとのことに候とは是なり

元來法藏因位のとき、兆載永劫所修の五念門を一名號に成就して、之を信一念の立所に、十方衆生に廻向し給ひたるものなれは、五念門中第五の廻向門の、普共諸衆生、往生安樂國と、行者の上に發動するは自然の數理なり。然りと雖も自體は有漏の凡夫なれは、勸化の效果、思の如く收め難きは固よりなり。是以て淨土往生を遂げ、

更に娑婆界に還來し、始て自由濟度の活動を現はすべし。歎異鈔（五丁）に、慈悲に聖道淨土のかわりめあり、聖道の慈悲と云は、物とあわれみ、かなしみ、はぐゝむなり。然れとも思ふが如く、助け遂くることわ、極めてありがたし。淨土の慈悲と云ふは、念佛して、いそき佛になりて、大慈大悲心を以て、思ふが如く衆生を利益すべきを云ふべきなり。今生にいかほといとをし、不便と思ふとも、存知の如く助けがたければ、此の慈悲始終なし。然れば念佛申す身のみそ、末とふりたる大慈悲心にて候へきとあるは、此の意なり、抑も教人信化他の、佛恩報謝に供はる理由は、佛の本心に稱ふを以てなり。故に定善義（十二）若得一人捨苦出生死者、是名眞報佛恩。何以故、諸佛出世種々方便、勸化衆生者、不欲直令制惡修

福受人天樂也。人天之樂、猶如電光、須臾即捨還入三惡、長時受苦、爲此因緣但勸即令求生淨土向無上菩提、是故今時有緣相勸奮、生淨土者、即稱諸佛本願意也。と云へり。前來引用せし諸文を對照せば、化他の敢て難事に非ざると、又た報恩行の、念佛一行に限らざることを領知するに足らむ

第十一章　供養は果して雜修なる乎

（佛事供養を以て雜修と貶する說を駁す）

念佛相續要文拾集云、助正おらへて修するをは、これも雜修と名けたりと、宗師の旨しられたり

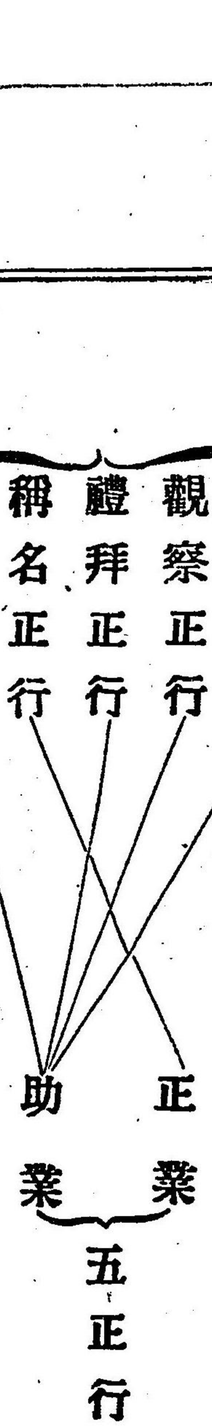
予は先きに助正おらへて修したり、信のうへは佛壇の掃除、朝夕香花燈明諸供養、佛事ことゝく何も彼も、手も足も、信の上は報謝と心得て、おらへて修したり。

隨て信心もかたからさりしあり、

（批評）、小川氏は念佛の一行は、本願相應の行なれは、佛恩報謝と云ふへし。其他禮拜供養等は、たゞ念佛を助けるまてにて、本願相應の行にあらず、且つ之を勤修せは、是卽ち助正兼行の雜修者なり

と云ふにあり。是亦た宗意に違戻するの甚たしきものなり。是に就て五正行を解釋せむ、

一。五正行の名を辨せは、一、讀誦正行。二、觀察正行。三、禮拜正行。四、稱名正行。五、讚嘆供養正行、之を五正行と云ふは、雜行に簡別せし言にて、專ら彌陀の淨土へ往生する正因正行なるを以てなり、又たこの五正行の中にて、正助を區分せは、第四の稱名を正定業とし、前三後一を助業と云ふなり。左圖の如し



但し觀經正宗分、定散二門の中にて、行の優劣を判ぜば、定善を優とし、散善を劣とするも、若し之を流通附屬の經意を以て、翻て一經の所說を判定せば、則ち第四の稱名を勝とし、前三後一の行を劣とす。是れ善導の助正の名を附し給ふ所以なり

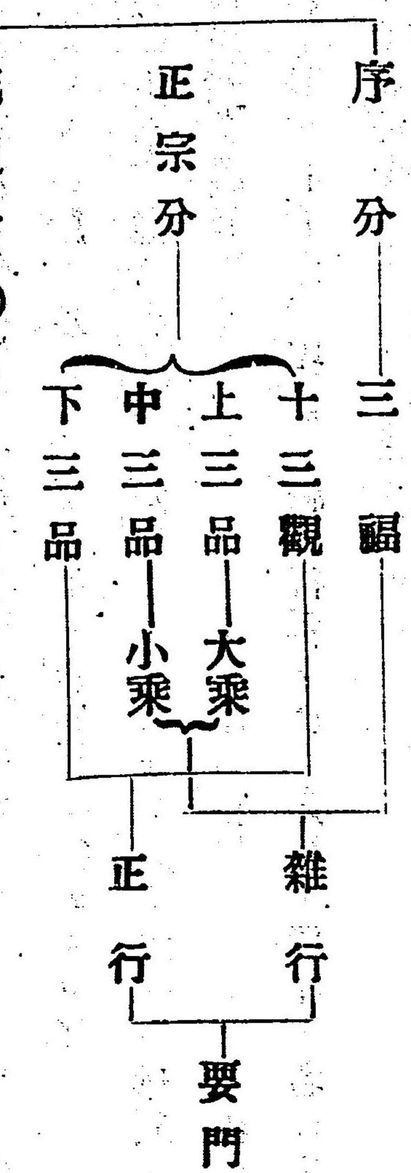
二。五正行の體を判せは、即ち觀經所說の法門、定散自力の行業にて、運心廻向往生、淨土の因行法なり、則ち第四の稱名と雖ゝ、經

文顯說の方に在ては、自力要門の區域を脫せず、此の五正行を直に弘願他力として、解釋する者あり。祖意にあらず。左圖の如し

三。五正行の所據の文を求めは、第一讀誦正行は、第八像相觀の令與修多羅合の文に依り。第二觀察正行は、廣く十三觀の文を所依とせしもの。但し正宗の說相たる觀察を至要とすれば、第一に觀察行を列すべきなるも、觀法修行に就ては、必ず聞思修の次第を履行す

べきものにて、經文讀誦の緣を以て、聞惠を生し、夫より次第入理して、思惠を生し、遂に定中に於て三昧發得し、淨土の莊嚴等、觀心分明に識知するを得、之を修惠と云ふ。故に讀誦行を先とし、觀察行を後とす。是れ觀法の次第順序なり。第三禮拜、第四稱名、此の二正行は下三品の、合掌又手稱南無阿彌陀佛の文に依り、第五讚嘆正行は、所依の經文なしと雖も、佛名を稱し、淨土を觀するもの佛を讚嘆供養せさるの理なし。是以て前四行に殘りし、往生の行業を一括して、之を第五の一行とせられしものなり

觀經は、正行雜行并說の經にて、序分の三福、正宗九品段の上中六品は雜行なれは之を除去し。唯彌陀一佛に關する行業に就て建立せられしが五正行なり。左圖の如し



四。定散兩門の說意を示さは、觀經一部に廣く、正雜二行を說示しながら、流通に至て之を廢除し、たゝ稱名の一行のみ擇取して附屬し給ふは何故そ。定散諸機を誘引して、念佛の一行に勸歸せしむる、釋尊の善巧方便なり。故に宗祖は、釋迦は要門ひらきつゝ、定散諸機をこしらへて、正雜二行方便し、ひとへに專修を勸めしむと仰せ

られたり

五。行人の種類を分ては、其數多し、略して二三を列擧せば、正業助業の分別なく、讀觀禮稱讚を均一平等に幷修するもあり、之を助正兼行の雜修と云ふ。宗祖の助正ならべて修するをば、すなはち雜修と名けたりとの給ふ是なり。又た五種の中、自分の意樂に隨ふて或は讀誦、或は觀察等、一行を選取して專修するものあり。化卷に五專ありとの給ふ是なり。又た平素念佛の一行のみ專修するも、時に災禍厄難、意外の不幸に際會するときは、忽ち思想を轉變して、加持祈禱を勤修するものあり。之を部類の雜修と云ふ、宗祖の佛號むねと修すれども、現世を祈る行者をば、之れも雜修と名けてがとは即ち是なり

已上擧くる所の行人、共に弘願他力にあらず、小川氏は此中何れに屬するを

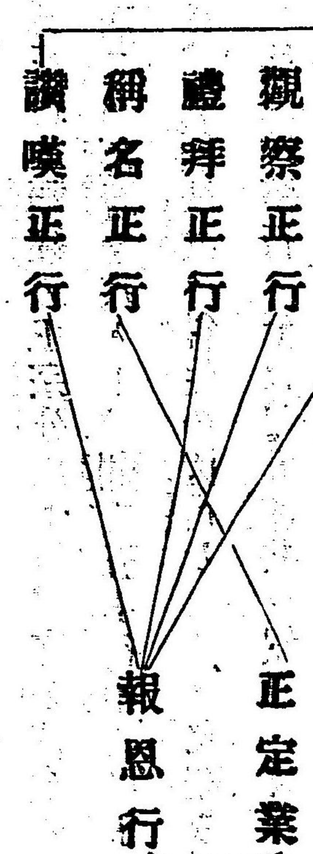
因みに、雜修の解釋に就て、元祖は雜行を修する者を、即ち雜修の行人とし、聖覺は念佛に諸善を兼行する者を、雜修人とし。宗祖は正行中にて、雜修を判釋し給ふ。三師の釋相は稍や差別する所あるも、其意趣遂に同一に歸す。今の所要に非されは、茲に贅せず

六。五正行の融會を論せは、前に縷述せし如く、五正行は其體要門自力の行法なるも、之を弘願の海中に投入するときは、天親の五念門と同一鹹味、共に信後相續の報恩行にて、更に其差別ありことなし。然るときは、讀誦、觀察等の次第を泯亡し、且つ其行相をも滅却せざるべからず。何となれば上に辯述せし如く、觀經所說の五種

正行は、必す讀誦觀察等の次第を守るも、之を信後の起行とせば、或は稱名を先とし。或は觀察を後とす。宗祖は散善義の正行段、讀觀等次第布列の文を化土卷に引用し、同く正助段の苦依禮誦等次第滅却の文を信卷に引用し給ひしは此意なり。又た觀經所說の觀察は修惠を本とするも、之を信後の相續法とせば、聞思の觀を主とす、其行相の殊異する所ろ此の如し。但し今唯一例を示すのみ、其他準して知るへし

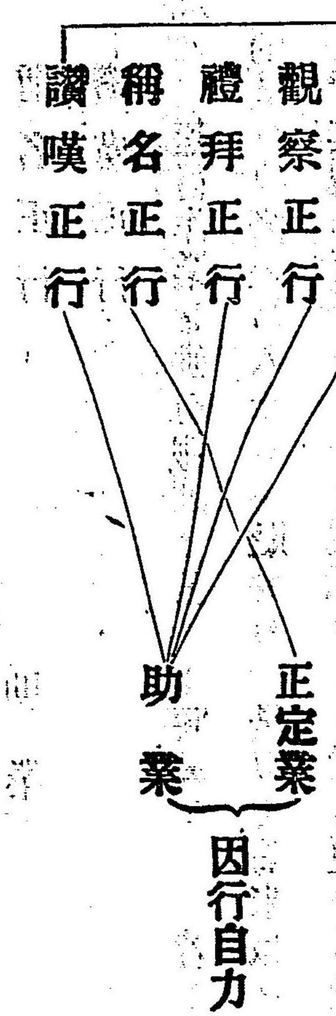
加之ならす、信海流出の起行作業は、讀觀等の次第滅却するは勿論其實正業助業の名稱すら自ら失亡するの道理なるも、第四の稱名念佛は、本願の誓文にありて、稱うる者を助けんと云へり。前三後一の行業は左にあらす、是以て彼此相照せば、第四の稱名を正業とし

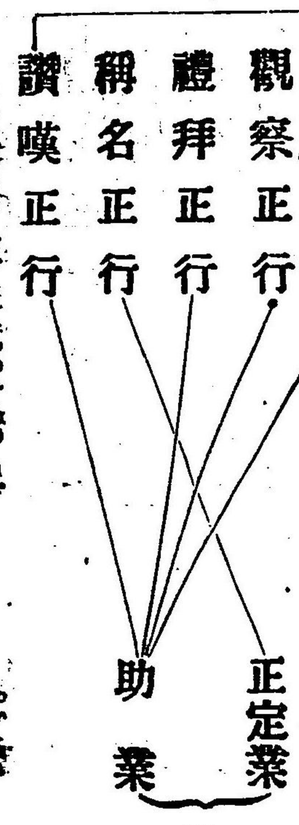
前三後一の行業を助業と區分するのみ。信卷拜に愚禿鈔等正助の名目を存せられしは此意なり。而して前三後一の第四の稱名を資助ずるよふは、破邪顯正鈔中(二六)に、この和讃は學ひ易きが故に、もし稱名のものすからんとき云云とあるは是なり。要するに稱名は正定業にして、且つ報恩行なり。前三後一はたゝ報恩行にして、正定業にあらす。而して五種共に他力廻向の行業なり。左圖の如し



實に五正行は觀經の正宗分により、之を往生の因行法に建立し、而〻流通分の經說を基とし、翻て五正行中に助正の別を爲し給ふものなれは、五種法共に往生の因行なること勿論なり。若又た之を他力信者の後念相續行とせは、五種共に報恩の業作なり。然るに小川氏は、第四の稱名のみを報恩行とし、前三後一を報恩の外とし、且つ之を修するは、雜修なりと云ふは何の謂そ。喩へは世間に善人と呼ふへき者あらは、其三業の動作共に善事なること明なり。若し惡性と名くへき者あらは、其云爲する所ろ渾て惡業なること必せり。口業の善人にして、意業の惡人なるものあらす。意業の善人にして、身業の惡人なるものあらんや。五正行も亦た此の如し、觀經顯說に在ては、共に自力の因行法なり。若し之を大經に歸入せは、渾て他

力の報恩行なり。一法中にて半は自力、半は他力、二物合糅するの理あらんや。圖の如し





小川氏は、起行作業を佛恩報謝と云へる明文なし、若し之を厲行すれば、則是れ雜修の行人なりと貶せり。是以て前來數々文證道理を引出して、其說の妄なることを說示せしも、今更に旣邪鈔を引證せん、其文に曰くこの機のうへには、他力の安心より催されて、佛恩報謝の起行作業はせらるべきに依てとあり。此の如き灼々たる明文如何ぞ通解するや。鹿を追ふ者は山を見ず、一方に僻するときは、全分に眼の及はぬ者なれば、或は此の旣邪鈔の票章に、二季の彼岸を以て、念佛修行の時節と定むるいはれなき事とあれば、文に佛恩報謝の起行作業とあるは、稱名一行を指示せしものと云はん、若然らば、次上の文に光明寺の和尙の御釋を伺ふに、安心起行作業の三ありと見へたりと云云、この文如何は辯疏するも。五念門を起行とし、四修を作業とせしば、往生禮讚の所說なり。若し强て信後の禮誦等の、起行勤修を雜修の行人と云ばゞ、宗祖も自力雜修の行人たるへし。口傳鈔中(十)に、宗祖御風氣云云その票章に、一つ助業をなをかたわらにしまして事とあり、又た古德傳九(十二)に、先師聖人沒後、中陰追善にもれたる事うらみなりとて、其聖忌を向ふることに、聲明の宗匠を屈し、緇徒の禪襟をとゝのへて、月々四日四

夜禮讚念佛とり行はれけり、是れしかしながら先師報恩謝德のためなりと云へり。此の如きの文證尠しとせず、是皆な雜修自力の所行と云ふべきか、思はざるの甚しきものなり

第十二章　一多證文の眞意

（一）多證文の別解者の文を引來りて、相續行人を誹謗せんとする說を駁す）

念佛相續要文拾集云、助業を好む人、これ自力を勵む人なり。自力と云は、我力をたのむ、我心をたのむ、我さま〳〵の善根をたのむ人なり。上盡一形とは、念佛せんこと命おはるまでとなりとの仰せ、これその證なり。これを宗師の旨と承る。もし此の正文欽ずくは、予の如きは報恩に安心するの日は得ざるものなり、

（批評）、引く所の一多證文は、他力行者の起行にあらず別解者の所行を解釋せられしものなり。何ぞ私曲偏見をなすの甚たしきや。文に云く（十八）別解は乃至念佛しながら、自力にさとりなすなり故に別解と云ふ。又た助業をこのむもの、これすなはち自力をはげむひとなり。自力といふは、我身をたのみ、我心をたのむ、我力をはけみ我かさま〳〵の善根をたのむひとなり云云。

此文二段と分れり。初段は自力念佛の行人を指し、次段のまた助業を好むものとは、念佛に諸善を加添し、以て助業と爲す者の事なり此の助業とは、前三後一の助業のことにあらず數多の善根を勤修するを云ふなり。故に文にさま〳〵の善根との給ふ、小川氏は、さま〳〵とは、數多非一の謂なれは、前三後一の行業、其數の多きを示

す言なりと思惟せしならむ。若し然らは更に類文を引來りて、其疑蒙を啓發せむ。和語燈錄二(三十四丁)に別解人の解釋に云く、總して同しく念佛を申す人なれども、彌陀の本願をは憑まずして、自力を勵みて念佛ばかりにては、いかゝ往生すべき、異なる功德を作り、異佛にも事へ、力を合せてこそ往生程の大事をば遂ぐべけれ。只阿彌陀佛ばかりにてわ叶はしと云云。この文を對照せば、さまゞの善根とは、前三後一の行業にあらず、或は異佛に事へ、或は諸善を勤修し、以て念佛の助業と爲す者を、指示せられし言なること曠然たり、

嗚呼經論章疏の明證ありと雖も、自見すれば必す過まる所あるべし依て師傳口業を最とすとの誡言、夫れ誰か爲めそ。思ふに小川氏は

雜行雜修、廢立隱顯、他力廻向、要門眞門等の、妙判を領知せず、聖道通途の常識を以て、今宗別途の法門を談するは、異門の鑰と謂つべし。其の信心正因を立つと雖とも、たゞ道理をきゝわけたる分齊にて、信心領受の義にあらず。故に其信心には、歡喜の思ひなく又た安堵の思ひに住することなし。是以て稱うる所の念佛を補塡して、聊か安堵心を求めんと欲するなり。則ちこの稱名報恩を說くと雖とも、是れたゞ世に銜ふの言のみ。要するに無信單行、眞門自力の行者なり。念佛相續要文拾集を一讀せば、其義顯然たり。

他力眞宗　報謝の眞義　完

明治卅五年十一月廿六日印刷
同　年十一月三十日發行

定價金拾貳錢

著作者　西川諦亮

發行兼印刷者　京都市下京區中珠數屋町通烏丸東入二十人訓町二十二番戶　西村七兵衛

不許複製

發行所　京都市東六條　法藏館

大取次　京都市西六條　興教書院　顯道書院

時世遷れの說教に厭けるものは本書を讀め。社會の文化一新せる時、說教ばかり徒に舊式を守れるは愚かならずや。著者此に憂ふるあり、嶄新なる意匠を凝らし、工夫に工夫を累ねて、遂に本書を公にす、先つ題を「釋迦牟尼は慈悲の父母」の和讀に取り、宗意安心の骨髓たる要門弘願の說意を明にするに、經釋に據り、御文を引き、流麗の辨舌河の如く、縱橫自在に一首を說き破れり。

赤松一男師著

新案說教慈悲父母

表紙石版 定價參拾錢
美本 郵稅四錢
全一冊

殊に二尊の大悲を父母に喩ふるに就て、之を信前に、一念の場合に、信後相續及び得生の場合に約して、最も詳密を極め、新譬喩を挾み。時代に適する因緣を擧げ、一言一句信者の腹をねぐり、叮嚀親切、痒ゆゝ所に手の屆く感あり。是れ實に布敎に取つて、清新便益なる參考書たるのみならず、眞宗信者が座右求道の友たるべし。

發行所 京都市東六條 法藏館

嗣講吉谷覺壽師校閱　講師細川千巖師遺稿

●安心道のしらべ百ケ條 附錄 信後心得十二ケ條 定價十五錢 郵稅二錢

葦名信慶師著

●たすけ玉への總括 定價十錢 郵稅二錢

東陽圓月師著

●たすけ玉への總括を讀む 定價八錢 郵稅二錢

五十嵐深慧師著

●たすけ玉への明細考 定價八錢 郵稅二錢

龍華空音師著

●二氏對評 たすけ玉への斷案 定價十錢 郵稅二錢

東陽圓月師著

●二諦の精神 定價二十錢 郵稅四錢

近世安心惑亂史

●信順清求法戰錄 定價二十錢 郵稅四錢

寶華院妙香尼公題歌

●眞宗安心ふくろ 定價六錢 郵稅二錢

清涼院義成老師遺稿

●眞宗安心手鑑 定價十錢 郵稅二錢

石原素兮著

●未來の光明 定價八錢 郵稅二錢

荻州外史著

●東本願寺獨立史 定價八錢 郵稅二錢

江村秀山師著

●大谷派法主實記 定價十五錢 郵稅二錢

鐵鷲子著

●教如上人 定價十錢 郵稅二錢

野田憲雄著

●鹿谷因緣談 定價十錢 郵稅二錢

小栗憲一師著

●玉日宮御小傳 定價六錢 郵稅二錢

土屋智重師著

●我等が安心 定價五錢 郵稅二錢

藤井義住師著

●法の馨（一名法義家內示談） 定價十五錢 郵稅四錢

文福齋述

●說教自在一口辨 定價八錢 郵稅二錢

敎覺寺和上說

●二河譬勸導辨 定價十錢 郵稅二錢

信仰を求むる人は早く「法藏」を御覽なさい

●活ける總會所は示談にあり

「法藏」は極の平易に眞宗の教義を傳へる雜誌ですから誰れでもありかたく讀まれます。

「法藏」は世の高僧名家の法話演說などを掲げますから家に居なからその聽聞か出來ます。

「法藏」は信仰上の疑問に就て、何んても詰上に答へます又信者の美談を載せ、教界の時事を報じます。

「法藏」は定價一部五錢、壹ヶ年分か五十錢（郵税共）

●通信示談は本誌の特色なり

光明に住む人は常に「法藏」をお讀なさい

毎月一回
一日發行

法藏

眞宗信者の好師友

申込所　京都市東六條中珠數屋町　法藏館

此券切抜封入の上御注文のこと

十慈雲尊者示衆	法藏創刊十周年紀念元價頒布券
定價拾貳錢 郵税四錢	
法話 全三百四十頁 第一冊	
定價拾貳錢 郵税六錢	
石集 全四百四頁 第一冊	法藏創刊十周年紀念元價頒布券

法藏は去明治二十四年十一月廿五日初號發刊以來茲に十年、佛陀慈光の下に健全なる信仰を鼓吹しつゝ、我親愛なる讀者諸氏と倶に十周年を迎へるに至りしは、偏に法藏の國書に限り、茲に於て平素愛顧に報ずる爲、印刷元價を以て頒布し、永く法藏創刊十周年の紀念とし、又進物用に供せらるゝ様、特に讀者諸氏の紀念として最價値あるものなれば、親しく進物用に供せられんことを望む、

法藏創刊十周年紀念元價頒布廣告

●●お待ちかねの新雑誌●●

法の寶

間接布教の大覇王！

年玉法事の好贈品！

○○讀めよ讀めよ功德あふるゝ好雜誌を、月に必ず一度は○○

○心靈の貧しき人達に、佛のみ藏を開けて、功德を施すたうとひ雜誌です、で、その主意は通佛教の信仰を弘めるのにあつて、老幼男女、誰でも讀めます。早く讀んで、自分が澤山の寶持となつたら、

初號目	佛教道德の大義	
二號目	菅公信佛談	
三號目	因果の理法	
四號目	活きた佛	
五號目	十大魔王	
六號目	靈魂問答	
七號目	佛教衛生談	
八號目	人の行く道	
九號目	堪忍の修養	
十號目	青年と念佛	

表紙石版製本美麗

定價一部壹錢○郵稅五厘

○但八冊迄郵稅貳錢の割

八冊毎に貳錢增す

○一年分拾八錢（郵稅共）

京都市東六條

發行所　法藏館

廣く天下にも惠を照けて下さい、世間には心の貧しい人達が多いから、之を法事や年玉に施本して下さると、間接の大布教になります

大奮發の廉價で毎月一回（廿五日）發行します。

○○施せや施せや佛のめぐめる法の寶を、人に必ず一部は○○

特45
156

他力
眞宗 報謝の真義

国立国会図書館

019085-000-8

特45-156

報謝の真義

西川 諦亮／著

M35. 11

ABF-2617